

## 私の戦争体験

甘木市 中西 ハルヨ

私の一家は北朝鮮からの引揚者です。

元山に大正14年に朝鮮に渡りました。戦時中は満州（現在、中国東北地方）に行かれる山下将軍や兵隊さんへのお茶の接待に元山駅まで何回も行きました。昭和14年に主人が咸興に転勤になり、太平洋戦争後は国防献金で家財の金目の物はみんなお国のためと提出いたしました。私も国防愛国婦人会員として町のお世話をしていましたので出る事が多く、夜は19年頃からモンペを着て寝ていました。

8月15日、家の前に兵隊さんがこられ、「今日重大発表があるので、ラジオの音を大きくして下さい」と言われて、30人ばかり直立不動で聞いておられました。敗戦と知った私は涙が出てどうする事もできませんでした。

8月はなんとか無事にすごせたのですが、9月に入ってソ連兵が進駐し、日本兵は捕虜としてソ連に連行されました。終戦直後、一人の兵隊さんがガソリンをかぶって自決なさいました。炎を後にせおった不動明のようなすさまじい光景で、今も目の前にちらついて忘れられません。

私達の家の方には、毎日のようにソ連兵が略奪に来ましたので、隠れるのに一苦労しました。

9月2日の朝、8月上旬終戦前に出張で満州の国境近くに行つて不在の夫の姿が不思議なことに目の前にちらつきますので、帰つて来たと思ひ駅に迎えに行きました。捜して回ると、貨車の天蓋にしがみついて乗っていました。駅の保安員が『下車する事は許されない』と言うのを、『家族がみんなここにいるから』と言って、何とか知人と二人、家に連れて帰ることができたのです。30日余りの逃避行に痩せ衰えて、元気な頃の主人とは想像もつかない程の変わりようで、目はおちくぼみ、足には10文と11文の地下足袋を縄で括り、着衣はぼろぼろ、汚れと汗で悪臭さえする上にシラミもちらほら見かけられました。汽車なら7、8時間で帰つてこられる所から35日もかけて歩き、私達のいる咸興の三つ先の駅で、貨車の天蓋に乗せて貰うのに金を払えと言われたとのことですが、金はみんな略奪されてしまっていたので、3日間飲まず食わずで使役させられ、やっとの思いで夏の暑いさなか汽車の屋根にへばりついて帰つて来たのです。

主人は電力会社の支店長をしていたのですが、避難する時に社員一人ひとりに200円、300円を渡し、8月14日から現地を出発して来たのだそうです。咸興に着き、ここで降りると言つたそうですが、『ここは食糧がないからだめだ』と言ってどうしても下車させてもらえず、困っていたところだったそうです。体は弱ってしまっているので、私が迎えに行つて強引に連れて帰らなかつたら二度と会えなかつたらろうと思います。

でもそれからが大変で、会社に行つた主人に、取られたお金、社員に避難資金として渡した

お金を返せと言われ、持って来なければ親子皆殺しにするとまで言われました。

主人は牢に入れられました。私は2万円近くのお金があるはずもなく、仕方ないので家にあるだけのお金と貯金通帳を小学校6年の子供に持たせました。これで駄目なら殺されても仕様がないと心にきめて。何とか気持ちが通じたのか、金の事から釈放されました。

社宅から小さい家に移れと言われ、少しばかりの着物と炊事用品、夜具を持って移り、明日ちゃんと引っ越しするつもりでしたら、翌日行ったら何一つなく、地下足袋の足跡ばかりでした。

寒くなって来て日本人避難民の死亡者が多くなり、死体を入れる穴掘りにかりだされました。荒筵に巻かれ荒縄で括られた死体がトラックや車力に積まれて、穴の中にポンポンと犬の死体のように捨てられてました。近くの飛行場の避難民2000人のうち、生残りは70人だったと聞きました。死体はこちこちに凍っていても、腹だけはぶよぶよと柔らかかったそうです。家にソ連兵が入って来た時、逃げ遅れてピストルをつきつけられました。どこでも討ちなさいと言って、撃たれて死んだふりをしたら悪い顔をして、着物類をとって出ていった事もありました。

でも、たまにはいい事もありました。娘が朝鮮人から石を投げつけられて困っていたそうです。そこに若いソ連兵が通りかかって助けてくれたそうです。また、私が頭を抱えて道に屈んでいると、ソ連の将校が通訳を通して訳を聞くので、『六畳一間に10人住み、その部屋で煮炊きせねばならず困っている』旨話すと、大変気の毒がり、兵隊を使って家をみつめてくれた上、荷物まで運んでもらいました。

また、兵舎で洗濯する仕事を世話してもらい、下着200枚を洗濯板でせっせと洗いました。兵隊がハンカチを出すのでちょっとと洗ってやると、10円何にも言わずにニコッと笑って渡してくれました。

そのうち、言葉も大分わかるようになったので、マダムのいる将校の家にメイドに行くようにしました。「マダムに食物を下さい」と言うと、色々といただきましたので、それを売って暮らしました。

ソ連人は子育ては厳しく、小さい子を皮の紐で叩きますので、胸に引寄せ私が子供の代りに自分を叩くように言うと、涙を流しながら敵の子供を庇ったと嬉しがっていました。それ以来皆から良くしてもらい、日本には帰るなど言われたのですが、主人は弱り切っていましたし、引揚げの連絡がありましたので、昭和21年9月18日、「ロコ」という港から一人1000円で闇舟に乗り込みました。途中、舟を狙撃されましたが、38度線に5日目に着きました。港を出る時は16船が一緒でしたのに、私達の船だけしか着港できなかったのです。みんなは、どうなったのでしょうか。恐ろしいことです。

米軍の世話を受けて食事も取れるようになりました。食事といっても豆の煮物ばかりですが、安心して食べることができました。

10月1日、日本から輸送船が来ましたので、乗船して佐世保に向いました。途中、船内で

の死亡者の水葬が2回ありました。汽笛の泣いているような音色が耳に残っています。船内での食事は、毎日押し麦の蒸かしたのを一食に湯呑一杯かカンパンを一握りだけで、お米は一食もありませんでした。佐世保に着いたのですが、湾内に米国の連合艦隊がいるということで、検疫を受けただけで上陸できませんでした。17日佐世保を出港して、九州を南下して広島の大竹に上陸、毛布等支給品を貰って佐世保行きの汽車にて甘木に帰ることができました。

実家に帰ると、弟が19年11月比島の海上で偵察機に乗っている時、戦死したと知らされました。また、主人は引揚げ間もなく、食べ物も芋ばかり、薬もなく悪条件の中、他界いたしました。5人の子供を残され途方にくれました。

主人が入院した国立病院で仕事を貰い、雑仕婦として66才まで働きました。そのおかげで比島にも弟の供養に行くことができました。今は、昔の悪夢を忘れることはできませんが、何不自由なく幸せに時を過ごしております。

戦争で亡くなった方、引揚げ中に命をおとされた方、忘れることはどうしてもできません。ご冥福を祈るばかりです。若い朝鮮の人から私は襟髪を掴まえられ、『日本は無条件降伏だから何をされても文句あるまい』と殺されそうになった事、着る物もなく唐米袋を身に付けた日本の男の人が今にも倒れそうに歩いているのを見て、唾吐きかけ、『死んでしましておる』と嘲笑っている様や、また、食べる物がなく、買う金もないのでしょうか、捨てられて枯れた大根葉を拾っている女の人、きっと子供さんがいるのでしょうか。それは書き足らない程の情ない日々を送ったものです。

このように体験談の書ける私よりも命を落とした方達こそ、悲惨な無言の体験者である事を忘れてはいけないと思います。私達に代わって死んでいった人々、その犠牲の支えで無事日本に帰ってこられたのだと思っています。

#### 追記

私達には住む家があったのですが、北の方から避難してきた人はそれは惨めなものでした。あの寒空に暖もなく、着る物もなく次々と死んでいかれました。私は家にある米、着物全てあげてしまい、自分達の食べる物さえない仕末でした。それでも一人でも多くの方が日本に帰られたらと願わずにはいられませんでした。

私達には配給米があり、1升19銭、ところが闇米は1升が200円もしたものですから避難民が買えるわけがありません。どんな気持ちで死んでいかれたのでしょうか。涙が止りません。